

心を育てるコミュニケーションの育成
— 一人一人の関わりを大切にしたい目標達成シートを活用して —

教職実践基礎領域
伊藤綾佳

I はじめに

学部時代からコミュニケーションについて学び、教職大学院でもコミュニケーションについて研究のタイトルにしたいと考えていた。大学院の講義での学びや、学校サポーター活動、教師力向上実習を行うなかで、生徒がコミュニケーションを円滑に行うにはどのようなことが必要になるのだろうかということを考えながら過ごした2年間だった。2017年の8月にはオーストラリアの小学校で実習を行い、海外の教育に興味を持ち、自分の研究にも生かしたいと思った。

教師力向上実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲでは異なる中学校で実習をさせていただいた。その中で一貫してコミュニケーションの育成をテーマに実習を行った。もちろん各学校生徒が違う。そのため、短期間で生徒理解することが必要となった。実習の回数を重ねるごとに、生徒理解の重要性や方法を知ることができた。実習Ⅰでは生徒の実態を上手くつかむことができなかった。この捉えの甘さを反省し、実習ⅡとⅢでは生徒理解も重視し、研究を進めた。本稿では実習Ⅰを踏まえ、実習ⅡとⅢで行った研究とその後の追加実践を主に取り上げ、研究報告とする。

II 主題設定の理由

1 今日的な課題から

中学校学習指導要領解説に、外国語科においては目標を「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う^①」と示されている。このことから英語科においてコミュニケーションの基礎を養うことは大切なことと考える。しかしながら、子どもたちの授業の取り組みには個人差が大きく、人前での英語を使ったコミュニケーションには自信のなさや恥ずかしさなどから抵抗感を持つ子どももいるのではないだろうか。積極的にコミュニケーションをすることができるような子どもを育てるためにはどのようなことが必要になるのだろうか。

そこで、先行研究を含めた様々な文献に当たっている際、古川(2012)^②のポジティブ教育心理学という文献に出会った。ポジティブ感情を生徒に身につけさせるためには動機づけが必要になるということが分かった。この文献によると「動機づけとは、心理学における最も重要な概念の一つであって、意欲をどのよう

にして高めるかは、何度もいうようであるが教育の最大のテーマであるといつてよい。意欲がなければ、人は学ぼうとしないだろうし、ましてや学び続けようとしなくてであろう。『やる気』や意欲は、心理学では動機づけ(motivation)の主題として扱われている。一般に、動機づけとは、人の行動を一定の方向に喚起させ、維持し、調整し、強化をしていくプロセス全体のことをいう。」と述べられている。このことから、私は、授業においても生徒に意欲をもたせるための動機づけを行うことが必要ではないかと強く感じた。

そこで今回、ポジティブ感情を大切にしたい授業を構成していきたいと考えた。ポジティブ感情とは、「人が強み等の自らの資源を最大限に活用し、適応的で自己効力感を持った生活を送ることに寄与できると考えられている。」「ポジティブ心理学の考え方を人生の早期に身に付けることは、個人の人生そのものを豊かにする可能性がある。学校現場でポジティブ心理学の考え方を取り入れることができれば、子どもは発達早い段階においてポジティブ心理学の考え方を学ぶことができる。」と菖蒲(2017)^③は述べている。また、「海外の学校現場ではポジティブ感情を用いた、人の強みや能力を活かす心理教育が行われている。」とも示されている。以上の考え方や取り組みを参考にこの実習で取り入れていきたいと考えた。

2 連携協力校の実態

ここでは、実習させていただいた3校の連携協力校の実態を簡単に述べる。

まず始めに、実習Ⅰでの連携協力校についてである。「思いやりのある温かい心で人に接し、親切・感謝・強い心を大切にする心豊かな生徒を育成する」という教育目標が掲げられている。先生方の努力もあり、子どもたちの様子は落ち着いている。しかし、私が実習をさせていただいた時は、不登校傾向を示す生徒が何人か在籍していたこともあり、教育目標である「強い心」を育てるといふことの必要性をより強く感じた。

実習Ⅱの連携校の教育目標は「自ら学び、不断の努力をし、思いやりのある生徒の育成」とされている。サポーター活動と実習を通して授業の様子を見せていただき、生徒を主体とした指導を心がけられているのだと感じた。生徒は教師が話している時は聞く姿勢を作ることができ、話し合いの場面ではペアやグループで話し合うことができる。積極的な挙手があり、参加態度も良い。しかし、実習前に全国学力学習状況調査

の結果を教えていただいたところによれば、「将来に向けての思いが少ない状況にある。」とのことだった。勉強に対する意欲がないというわけではないが、将来の希望を持って勉強を行っているわけではないということがいえるのではないだろうか。

実習Ⅲの連携校は、生徒の自主性を大切にされているということが分かった。校長先生の講話では、「学校は、社会に出るための自立をするために色々なことにチャレンジさせ、失敗を経験させ成長させる場所である」というお話をお聞きした。さらに、「中学生という成長段階は様々な失敗を経験し、傷つくことがある。しかし、それを教師が見守ったり、助けたりし、成長を促している」ということをお聞きした。生徒数、クラスが多い中学校だったため、全体を見ることができたわけではないが、自主性を出せているクラスと、少し出せていないように感じたクラスがあるのではないかと感じた。

3 目指す生徒像

今日的な教育課題と連携協力校の生徒の実態から目指す生徒像を以下のように設定することにした。

◎自信を持って、積極的にコミュニケーションを行うことができる生徒

目指す生徒像を達成するための手だてとして、ポジティブ心理学を用いた実践を考えた。自信を持って積極的にコミュニケーションを行っていくことができる生徒を育てるためには、自らを大切にしたい強い心を育てていかなければならないと考える。心を育てる方法として、希望、前向き、喜び、笑い、安堵、感謝などを示すポジティブ感情を利用していく。ポジティブ感情により自己肯定感や満足感を得られ積極的にコミュニケーションを取っていくことができる生徒の成長を促していきたい。

III 研究の計画

1 研究の目的

本実践研究においては、「希望」というキーワードを基に、ポジティブ感情を大切にしたい授業を行う中で、生徒たちが希望を持つことができるような取り組みを実践したいと考えた。そのために、以下に示す研究論文の内容を参考に研究計画を立案した。

菖蒲 (2017) ③のポジティブ心理学を用いた心理教育の特徴という論文では、海外のポジティブ心理学を用いた学校での12の実践報告が整理されている。それは三つに分類され、以下のように示されていた。

- ① 主観的 well-being を高めることを目的としているプログラム
- ② 希望を高めることを目的としたプログラム
- ③ 社会性と情動を高めることを目的としているプログラム

報告されている実践例の中で、②として示されている「希望を高めることを目的としたプログラム」が自

分の実習の授業づくりの中に取り入れられるのではないかと考えた。また、②の実践報告の中に掲載されている Susana C. Marques (2009) ④の Measuring and Promoting Hope in Schoolchildren という論文において以下の項目が紹介されている。

- ①希望について学ぶ
- ②希望を構成する
- ③ポジティブで明瞭な目標を作る
- ④目標を作る練習をする
- ⑤将来にむけ、目標の見直しと応用を考える

この希望を高めることを目的としたプログラムでは、目標を立てることで人生への満足感と自己肯定感を高めることが明らかになったという結果が出ている。今回の実習では、特にこの実践のように「目標を立てる」ことを取り入れた授業実践を行っていきたいと考えた。

2 研究の手立て

実習Ⅰでの自分の取り組みの甘さから学んだ、より的確な生徒理解をもとにした実践指導の大切さをその後の実習で生かすことを心がけた。

実習ⅡとⅢでは、「目標達成シート」を用いた実践を行った。具体的には、授業が始まる前にその日の目標を目標シートに書く。目標の設定については、次の古川 (2012) の考え方を参考にした。「人間は、目標志向性をもった存在である。また、目標は主観的幸福感と関連がある。目標達成に向かっている時は、抑うつとは縁がないが、うまく達成できないのではという心配は増加する。努力は傾けているほど、また失敗の自分に与える衝撃の可能性が大きいほど心配は増加する。さらに、達成不可能な高望みをすれば、焦燥感や不充足感をもたらす。達成可能性が高いときだけ、ポジティブ感情になる。」「目標設定と課題の遂行（動機づけ）の関係に関する研究では、課題遂行のための十分な能力と目標に対する受容があれば『何個完成させなさい』というような明確で挑戦性のある目標の方が『ベストを尽くしなさい』『優しい人になりなさい』等の曖昧で単純な目標よりも高いパフォーマンスが得られることが指摘されている。」と古川 (2012) ⑤は述べている。そのため、目標設定については、あらかじめ教師サイドでいくつかの目標を用意しておき、生徒に選ばせるという形で実施した。そして、授業で達成できたかどうかについて、簡単に3段階評価で生徒に自己評価させることにより、確認のしやすさと時間短縮と考えた。以上の活動を繰り返し、目標を達成したことでポジティブ感情を手に入れ、自信を持って積極的にコミュニケーションを行うことができることを目指す。

※アンダーラインは筆者により加えた。

IV 授業づくりについて

1 教師力向上実習Ⅰでの実践報告

(1) 生徒の実態

様々な文献によれば、中学2年生はセルフエスティームが低く、自分を大切にできていない時期であるといわれていることが多い。また、平成28年の9月からサポーター活動を行い、実習が始まるまでの約半年間で生徒の様子を観察していたところ、その中で、自分の気持ちを言い出せず我慢しているのではないかと感じる場面があった。そして、サポーター活動において、スクールライフという生徒が毎日書く日記の点検をさせていただいた際には、コミュニケーションに関する悩みが書かれている日記を見るということがあった。相手の気持ちを考えられず、相手に嫌な気持ちを与えてしまったことや、相手の言ったことをネガティブに捉えてしまい、傷ついてしまっている生徒の様子を知ることができた。さらに生徒に対し、コミュニケーションについてのアンケート調査（アサーションチェック）を実施したところ、自分の意見を上手く表現できない傾向を示す回答をしている生徒がいるということが分かった。

このようにサポーター活動をする中で、連携校の生徒にはコミュニケーションにおいてアサーショントレーニングが必要であると考えた。

(2) アサーショントレーニングとは

アサーショントレーニングとは、相手の気持ちを考えたコミュニケーショントレーニングである。阿部⑤(2005)は、アサーション・トレーニングの定義について、「自分も相手も大切にしようとする自己表現で、自分の意見、考え、気持ち、欲求などを、正直に、率直にその場にふさわしい方法で述べることであり、また同時に、相手が同じように表現することを待つ態度を伴うものである。言い換えると、“相互の関係性を大切にしたい他尊重のコミュニケーション”ということができる。」と述べている。また、ロバート&マイケル(1997)⑥は「アサーティブ行動は、平等な人間関係を促進する。これにより、自分が自分のために行動し、びくびくせずに自分の権利を守るために立ち向かえるようになる。さらには、自分の感情を無理なく素直に表現し、人の権利を侵害することなしに、自分の権利を行使できるようになる。」と述べている。以上のことから、このトレーニングは相手の気持ちを考えたコミュニケーションを構成し、練習することができるため、連携校の生徒にも有効な学びになるのではないかと考えた。

(3) 授業構想

道徳の時間を1時間いただき授業を行った。自分の意見を上手く表現できない生徒や、自分の意見ははっきり言うが、相手の気持ちを受け止めることができない生徒など様々なタイプの生徒がいる。その様子から、生きていく中で自分の考えや気持ちを大切に、相手の考えや気持ちも尊重する。そんな自己表現やコミュ

ニケーションする力を育むことが必要であると考えた。授業の主題は「互いを認め合い、高めあうコミュニケーション」とし、アサーショントレーニングとして三つの話し方を紹介し、その話し方について考えさせる授業を行った。三つの話し方とは、攻撃的、非主張的、アサーティブな話し方のことであり、説明や例を基に三つの話し方の違いを知る。さらに、自作のシナリオを用いて、ロールプレイを実施することで、自分の話し方と比較させ、自分の話し方がどのような状況にあるかを確認させる。自分のことも他人のことも大切にしたいコミュニケーションを目指すためにも、アサーティブなコミュニケーションのよさを生徒に知ってもらうことを目指した。以下に授業の構想を示す。

導入	1 コミュニケーションとはどのようなものかを考え、発表する。
展開	2 コミュニケーションの取り方について考える。
	3 普段どのようなコミュニケーションの形をとっているかを演技と比較し、自分のコミュニケーションはどのようなものかを考える。
	4 アサーティブな話し方について説明を聞く。
	5 アサーティブな話し方をペアになりロールプレイする中で体感する。
まとめ	6 授業の感想をまとめる。
	7 アサーティブな話し方についての教師の話聞く。

(4) 授業実践の報告

実習に入る前に非主張型、攻撃的、アサーティブの三つのタイプの中で、生徒の分布がどのようになっているかのアンケートを行った。調査前に実践クラスでは非主張型のコミュニケーションをしている生徒が多いと感じていたが、アンケートの結果では、大きな偏りはなく、非主張型の生徒が多いという予想は、外れていた。しかし、非主張型の生徒が少なからずいるということは分かったため、計画通り実践した。

授業を行う上で、非主張型の生徒を男女1人ずつ設定した。まず、実習のはじめに書かせた簡単なプロフィールの項目に、自分を表すキーワードは何かという質問項目を入れてみた。男子生徒は「黒」、女子生徒は「根暗」という文字が書かれていた。理由は書かれていないが、どちらもネガティブなキーワードなのではないかと受け取れるものであり、自分にマイナスなイメージを持ち、自信を持てずにいるのではないかと予測した。

また、学校での生活において、気になる生徒たちの休み時間や授業などの様子を見ると、自分からは話し

かけることはしないため、時々一人でいるということがあった。友達といる際は、常に聞き手に回っている様子であると見受けた。そこで、コミュニケーションの必要性を知り、学級の全員に対して自分のコミュニケーションの様子を振り返る機会となるような実践を考え、抽出生徒の様子を中心に分析した。

授業では、導入部分において、コミュニケーションにはコツが必要になるということを考えさせた。次に攻撃型と非主張型のコミュニケーションの違いの様子を比較させてから、自分のコミュニケーションはどのような分類に近いのかを考えさせた。ここでの発表では答えを求めすぎたため、生徒のことばを無理やりアサーションにつなげてしまった。そのため、アサーションとは何かについて教師から与えてしまう授業になってしまった。この場面で教え込まなければ、コミュニケーションの違いに着目させることで、より生徒の心に落ちたのではないかと反省している。アサーティブを知った上で、ペアで行うロールプレイでは「アサーティブを意識して」という指示なく始めてしまったため、生徒の中にはアサーティブを意識できなかった生徒もいたと考えられる。授業中に書くワークシートの内容からも理解できていないような記述をしている生徒を確認したため、今後授業を意識させる際はしっかり指示をしなくてはならないことを痛感した。しかし、抽出生徒の記述では、アサーティブを意識するような前向きな記述を確認することができた。男子生徒は「人間としての伝えることの大切さが分かった。コミュニケーションが苦手な僕も少しずつコミュニケーションが好きになればそれでいいです。」という記述をした。苦手ということは把握しているが、少しずつ好きになっていけたらということであると判断する。また、女子生徒の記述では「私は非主張的だと自分で思うので（中略）すぐには直せないと思うけど、そう感じてしまう人がいることを頭に入れてこれから人と話していこうと思います。コミュニケーションからの連想が苦手しか出てこなかったのもう少し視野を広げてみたいと思った。」という記述がされていた。この女子生徒もコミュニケーション＝苦手なものというように考えているが、今後は、苦手ではあるが自らの視野を広げ、一歩進んでよりよく関わられる材料を探そうとしていることがうかがえた。

さらに、授業後のワークシートで今回の実践の目的が理解できていない生徒がいたことが分かった。授業においては、学級全員に教師のねらいが伝わるような授業の進め方をしていけないといけなく強く思った。反面、授業のねらいを理解できた生徒もいたが、その生徒の理解については、アサーションを取り入れたコミュニケーションを知るという段階に留まっており、後の日常生活で生徒自らがコミュニケーションを考えるような段階には到達していない。そのようになるに

はどのように働きかければよいかを考えていくことが今後の課題である。

2 教師力向上実習Ⅱでの実践報告

(1) 生徒の実態

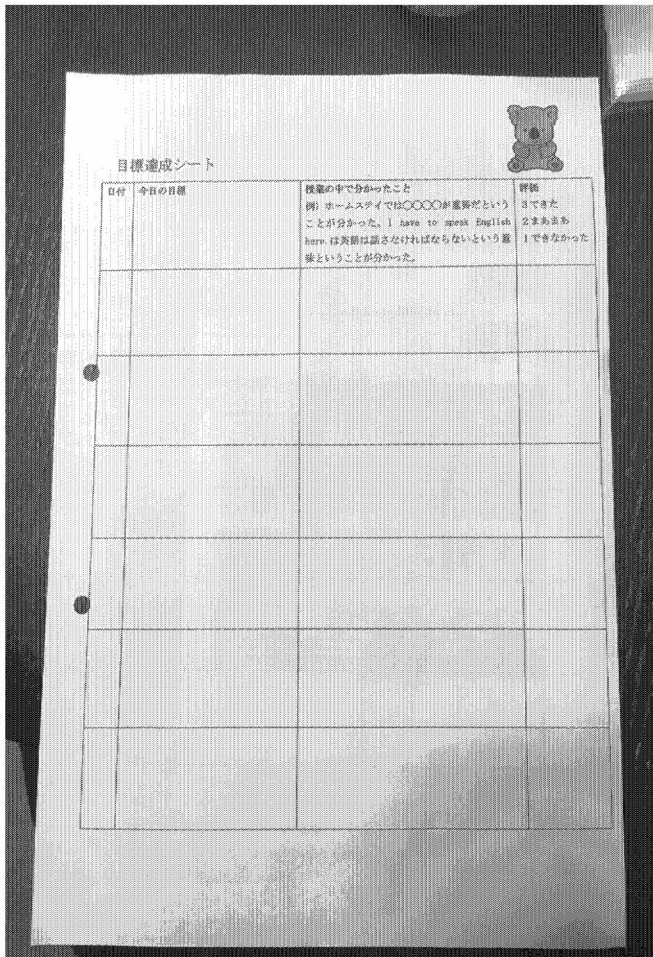
実習前のサポーター活動で関わる中で、その様子から、初めて出会う人に対して人見知りせず話することができる生徒が多いと感じた。配属していただいたクラスの学級経営案を見せていただくと、『誰からも愛されるクラス』という教育目標が掲げられていた。担任の先生は授業や授業以外の時間でも、“愛される人になるために”ということばを繰り返し使われていたため、生徒がそれを常に意識できるような環境が整えられていた。この教育目標の通りで温かいクラスが出来上がっていると感じた。

(2) 授業構想

この実習Ⅱでは、英語の授業を4クラスの授業に関わらせていただき、11回の授業実践をさせていただいた。単元はUnit4 Homestay in the United Statesで行った。以下に研究授業での流れを示す。

導入	1 歌を歌う ウォーミングアップのため、大きな声で表情良く歌わせる。
	2 ペアになり、お題についての会話を行う。
	3 目標達成シートの記入 ★ 目標を持って取り組めるよう、目標の意識化のための達成シートを記入する。
展開	4 文法の復習 前時に行った must の文の作り方を復習させる。
	5 アクティビティ must を使ったゲームを行う。
	6 単語 単語の意味と発音を確認する。
	7 本文理解 CDを聞き、どのような内容だったかペアで確認する。
まとめ	8 学習プリントを用い、本文の文法・語法の確認をする。
	9 目標達成シートの記入 ★ 目標が達成できたか。また、授業で分かったことを記入する。

通常の授業に目標達成シート★の記入が組み込まれた授業構成となっている。3の目標達成シートの記入で目標を選ばせ、授業の最後に目標が達成できたかということと、自己評価を行う。実践に入るまでの通常授業の際の生徒の様子を見ると、積極的に授業に参加している姿がうかがえたため、授業の構成はあまり変えないように配慮し授業実践を行った。



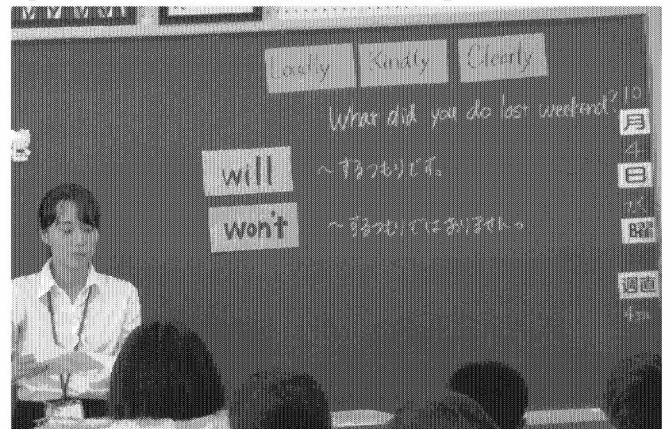
【写真1 実習Ⅱにおける目標達成シート】

さらに、指導技術力の開発という大学院の授業において、佐藤(2010)⑦の「教育の方法」という文献を読んだ。そこには阿原成光⑧の章があり、楽しく分かる英語の授業について学ぶことができた。実際にはどのように子どもが楽しそうに授業を受けているか気になったため、中学校での英語の授業という動画を見た。文献にもあったように「Loudly, Kindly, Clearly!!」と発声三原則を生徒が大声で言っていた。それを言っている生徒は笑顔であり、楽しそうだと感じた。発声三原則だけでなく問題に答えられたら「Yeah! Yeah! I'm happy!」と大きな声で言っていた。所々で大きな声を出させるようにしていた。上野(2007)⑨は、「子どもの主体性の形成が可能になるのは、近代学校における教授一学習という一方向的な『啓蒙関係』ではなく、それを乗り越える関係性において、教師と子どもが身体的な「ノリ」の共有(身体的同調)によって築く関係性においてのみである。」と述べて

いる。発声三原則はノリを身に付けさせ、教師と生徒との距離を縮め、生徒の主体性を育むものではないかと考えられる。そこで、授業をより楽しく感じられるよう(ポジティブ感情)、授業冒頭のペアでお題について話していくところに、発声三原則を取り入れ、ペアで話す前に意識してほしいこととして紹介した。



【写真2 実習Ⅱの授業実践の様子】



【写真3 発声3原則】

(3) 授業実践の報告

今回行った調査方法は授業の始めに目標達成シートに本時の目標を書かせる。目標設定に時間がかかることを避けるため、あらかじめ教師で用意しておいた目標3択の中から生徒に選ばせて書かせた。三つの目標は、授業の中で達成可能とするハードルの高すぎない目標を考えた。例えば「目標①単語・文法を理解する 目標②本文を理解する 目標③積極的に活動に取り組む」などである。その後は通常の授業を進めた。授業の終わりに目標が達成できたかどうかを自己評価させる。評価は三段階評価にし、「評価①できなかった 評価②まあまあ 評価③できた」という評価で行った。授業実習の関係もあり、そのクラスで達成シート記入ができたのは3回だった。目標達成シートを回収し確認してみると、評価①を書いた生徒は一人だけだった。ほとんどの生徒が、「目標を達成することができた」と感じたということが考えられるだろう。授業で分かったことを書く欄には、今回できたことを書いたり、

出来なかったことを書いたりしていた。できなかったことに関しては、「次回はできるようにになりたい」と前向きに書いている生徒もいた。反省としては、授業をする前に生徒がポジティブ感情を持っているかどうかという調査が出来ていなかったことが大変残念である。

3 教師力向上実習Ⅲでの実践報告

(1) 生徒の実態

教師力向上実習Ⅲでも2年生のあるクラスで実習させていただいた。そのクラスは、授業を聞く姿勢が良いという印象をもった。しかし、実習期間が短かったため、クラスの生徒全員とのより深い交流は難しかった。その中でも、自ら話しかけて来てくれる生徒や、こちらから話しかけると、恥ずかしがりながらも返事をしてくれるような生徒も何人かいた。私が気になった実態としては、授業の聞く姿勢はできているが、積極的に参加しようという態度を示す生徒が少ないと感じたことだった。日々の授業は、受け身で聞くことが多いというような姿勢になっているのではないだろうかと感じた。

(2) 授業構想

実習Ⅲでは、Daily Scene5の道案内の単元で1時間研究授業の時間をいただいた。以下に授業の構想を示す。

導入	1 英語であいさつをする 英語の雰囲気づくりをするため。
	2 目標達成シートの記入 ★ 本時の学習目標を知った後に、学習目標を達成するための自己目標を選択させる。
展開	3 新出語句の発音と意味を確認
	4 本文の内容を理解させる CDを聞き、聞き取らせ、どのような内容だったかをペアで確認させる。確認のため、英問英問しながら、内容が理解できているかをチェックする。
まとめ	5 本文を音読する 様々な音読方法で、今回の内容が身につくよう進めていく。
	6 目標達成シートの記入 ★ 自己評価を行う。

実習Ⅱで行った授業から、音読や生徒同士のペアで話合わせる機会を多くとり、授業に参加する場面を多くしたことで、より大きな目標に対する達成感が得られたのではないかと考えたため、この実習Ⅲにおいても、生徒が活動する機会を多く設定した。さらにこの実習では、目標達成シートにアンケートを加えた形に改良し、生徒のポジティブ感情を調査した。実習Ⅱと

【写真4 実習Ⅲにおける目標達成シート】

同じく、★の部分为目标達成シートを使っている場面である。

(3) 授業実践の報告

「目標を達成できたことでポジティブな気持ちになりましたか？」という質問にYesと答えた生徒は35人中28人という結果だった。ほとんどの生徒が、ポジティブ感情を感じることができたと言っても良いのではないだろうか。Yesと答えた生徒が書いた目標達成シートの授業の振り返りから、ポジティブ感情を感じられるものを二つ紹介する。一つ目は、「本文を覚えることが難しく大変だったけど読むのは楽しかったです。これからは、自分でも目標を立てるということをしていきたいです。」という振り返りである。この生徒は、「本文が理解できる」ということを今日の目標に選んでおり、授業において本文を学ぶ中で目標を意識することができていた。「楽しかった」や「これからも目標を立てていきたい」という言葉からは、目標達成の意義をより強く感じていると考えられるのではないだろうか。二つ目は、「私は英語が嫌いですが、個人目標を持ってやるのはとても楽しくて自分のレベルに合わせて授業が受けられるので良かったです。」ということが書かれていた。実習Ⅱでは、レベルを考えずに三つの目標を設定していたため、今回の実習Ⅲではレベル別の目標にし、生徒各自のレベルに合わせて目標を設定するように変更した。生徒のレベルを考えた目標を設定することで、より強いポジティブ感情を育てられるということが言えるのではないだろうか。

この実習では、次のような課題が見つかった。

一つ目は、今回の授業実践では、目標達成を促すような試みをしていなかったため、どのように声かけをするか、そして、その声かけを授業展開のどこで与えていくかという授業の進め方を考えていかなければいけないと思った。ご講評の際、メンターをしていただいた先生から声かけの例を提案していただいた。例えば、単語の発音練習の際、「②単語が理解できる」を

目標に選択した生徒に対して、「②を目標に選んだ人はここで理解できるように意識してみよう！」と声をかける。そうすることで、目標を意識しやすくなる。このような生徒が選んだ目標を応援するようなことを、次の授業実践には積極的に入れていきたい。


二つ目は、自己評価を何段階評価にするかである。中学生に3段階で評価させるのはどうかという指摘をいただいたが、時間的にも3段階は答えやすく、次の振り返りにもつなげることができると考え、あえて行ったが、結果としては不十分であったと考える。今後においては、自己評価のあり方についての研究をさらに進め、より生徒が自己評価しやすいような形式を備えたワークシートを作っていきたいと思っている。

V 実習終了後に実施した追加実践より

実習Ⅱ・Ⅲで目標達成シートの活用方法を改良することができたため、実習Ⅱでお世話になった学校で、残りのサポーター期間に追加実践をさせていただくことができた。実習Ⅱでは、目標達成シートの自己評価の欄に「授業の中で分かったこと」というような、反省だけを書くように指示をした目標達成シートを作ってしまった。そのため、ポジティブ感情を持つことができたかどうかという判断を、書かれている文面から読み取るだけになってしまったため、調査としては分かりにくいものになってしまった。また、実習Ⅲでは、自己評価の仕方が3段階では評価がし辛いのではないかという指摘と、自己評価が1だった生徒は、ポジティブな気持ちにはならないのかという指摘をいただいたため、その点を改良した自己評価シートを考案した。改良した目標達成シートは写真4に示している。

組 番 名前()

目標達成シート
今日の目標を選んで書きましょう。授業の最後に自己評価しましょう。



日付	今日の目標	自己評価と授業の振り返り

アンケート

1. 授業中に目標を達成しようと意識しましたか? -----Yes / No

2. 目標を達成できたことでポジティブな気持ちになりましたか? -----Yes / No

【写真5 追加実践Ⅱにおける目標達成シート】

追加実践においては、目標達成シートの改良に加えて、実習Ⅲで指摘をいただいた目標達成を促す声かけも積極的に行うよう意識した。声かけは、生徒が授業に慣れてきた頃に、目標を持って取り組んでいたことを忘れることを防止するために大切なことだが、実習

Ⅲに入るまでの私はできていなかった。サポーター活動中ということもあり、実習のような極度の緊張はなかったため、声かけを忘れることなく行うことができた。目標達成シートの下にあるアンケートの中の「授業中に目標を達成しようと意識しましたか?」という質問にYesと答えた生徒は全員だった。このアンケート結果からも、生徒に意識させる授業の進め方をすることができたといえるのではないだろうか。「目標を達成できたことでポジティブな気持ちになりましたか?」という質問に対してYesと答えた生徒は、18人中14人という結果だった。しかし、4人がNoと答えていた。この4人がポジティブな気持ちになれなかったのは、全員に目標達成させるような細かい配慮のある授業を行うことができなかったからだと考えられる。この記述の中で、私自身の力不足だったとわかる記述がされていた。そこには、「本文の意味はぜんぜん理解できませんでした。1つ1つの単語から理解していきたいです。」このようなことが書かれていたことから、全員が分かるような授業を実践していかなければならないことの大切さについて身をもって体験できた実習であった。

VI 生徒との関わりについて

本稿のはじめにも述べたように教師力向上実習Ⅰにおいて、生徒理解を十分に行うことができなかった。そこで、その反省を生かし、教師力向上実習Ⅱでは、積極的に生徒理解に努力することができた。実態把握については、授業中や授業外での言動を細かく見ていく必要がある。実習Ⅰまでの自分は生徒とのコミュニケーションに戸惑っている部分があり、上手くコミュニケーションがとれずに過ごしてしまっていた。実習Ⅱにおける具体的に行った手立てとしては、自己紹介の際に自己開示の返報性を利用し、私自身の特徴となる情報(中国語が話せることや合唱が得意など)をできるだけ多く生徒に伝え、生徒が話しやすい状況をつくることで、生徒自らの情報を発信しやすくさせるようにした。また、9月当初、英語の授業に参加する中で、英語で質問するコーナーがあり、クラスの生徒が私に質問をした。その際も、自分の情報を生徒に開示する努力をすることができた。さらに、生徒の特徴や好き嫌いなどをメモしておき、生徒との会話づくりに生かしながら、生徒一人一人の様子をつかむよう取り組んだ。自分の話しやすい生徒と話す癖をつけてしまうと、他の生徒との関わりを無くしてしまうため、偏りなく話すことを心がけた。また、生活ノートという生徒が毎日書く日記のようなものの点検をさせていただくことができた。普段、関わりが少なくなってしまう生徒のことも、その生徒の生活ノートを見ることで、どのようなものが好きで、どのような考えをもっているのかなどの情報を得ることができた。外面

的な様子からでは分からない心の中を見ることができ
るため、生徒理解の大切なツールだということをも
って体験することができた。さらに、生徒が書いた
ことに対して返事も書くため、コミュニケーションも
取ることができた。

実習Ⅱでお世話になった連携校では学級通信の発行
も携わらせていただいた。学級通信からもポジティブ
感情について伝えたいと思っていたため、通信の内容
に写真6のようなことを書いた。

この通信には、「ポジティブな言葉を普段から使うよう
にすることで、内面の自分の魅力が引き出せるようになる」
ことや、「人生を楽しむこと」や「幸せを感じること」など、ポ
ジティブな考え方を意識することの大切さなどについて書
いた。学級通信だけでなく、朝の会や帰りの会などで私が

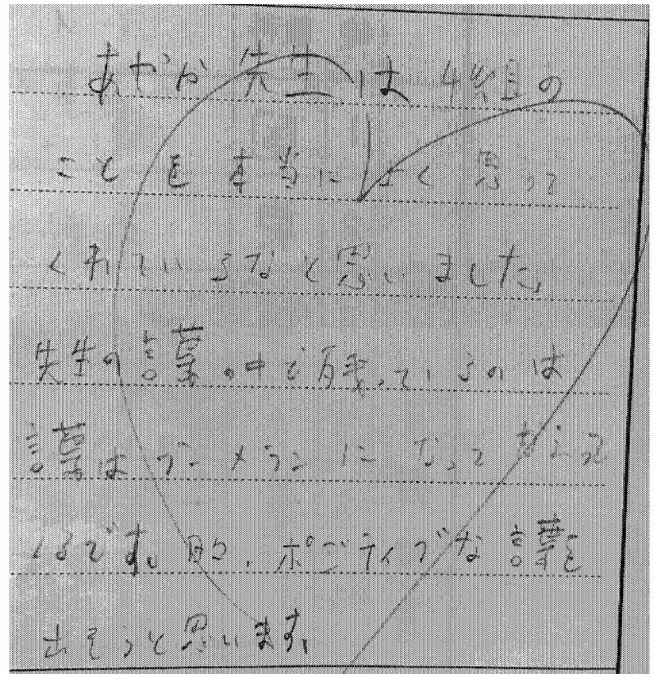


【写真6 学級通信】

話す時間を与えていただいた時には、ポジティブ感情に
ついての意識を積極的に促すような内容を伝えることに配
慮し話をした。

サポーター活動の最終日には、生徒たちが書いた生活
ノートの記述の中から、ポジティブ感情について伝わ
ったのではないと思われる記述を発見することができ
た。「あやか先生は4組のことを本当によく思ってく
れているなと思いました。先生の言葉の中で残ってい
る言葉は、ブーメランになってかえってくるです。
日々ポジティブな言葉を出そうと思います。」という
ある生徒の記述であった。話す機会を与えていただき、
そこで自分の伝えたいことを伝えることができた。こ
れまで、生徒に伝えたいことが伝わっているかどうか、

なかなか確認できていなかった。しかし、この実習で
しっかりと確認することができた。生徒の関わりに自
信がなかった私だったが、サポーター活動の中で、朝
の会や帰りの会、学級通信など、様々な手段で生徒に
伝えることができるということを学ばせていただいた。



【写真7 生徒の生活ノート記述】

Ⅶ 結果と考察

3回の教師力向上実習及び1年3ヶ月のサポーター実
習において、「心を育てるコミュニケーションの育成」を目
指して取り組んできた。その中で得られた結果の内容とそ
れに対する考察について以下に述べる。

(1) 実習Ⅰにおける結果と考察

実習Ⅰにおいては、抽出生徒の記述から、生徒がコ
ミュニケーションについて前向きに考えるきっかけに
なったと考えられる。しかし、一回の授業の中では、
生徒にコミュニケーションについて深く考え、生徒の
日常生活に落とすというところまで出来なかった。も
し、今後生徒の様子から、アサーショントレーニング
を行いたいということがあれば、もう少し、時間をか
けて行っていきたい。



【写真8 実習Ⅰでの道徳授業板書】

この実習では、授業分析の基本となる生徒理解が思
うようにできていなかった。つまり、自分の生徒に対
する働きかけや関わりの方は、限定された子どもに

対する関わりであり間違っていた。また、コミュニケーションについてのアンケート結果も不十分なものとなってしまう、授業実践の目標設定に生かすことができなかつた。

そこで、実習Ⅰのような失敗はすまいと思い、その後の実習では、生徒の捉えに重点を置いて取り組んでいくことに留意した。

(2) 実習Ⅱにおける結果と考察

実習Ⅱでは、英語の教科指導を中心に授業実践に取り組んだ。特に生徒理解においては、連携校の担当教官の先生の助けもあり、サポーター活動を活用した積極的な生徒理解に心がけた。実習前の1ヶ月間、サポーターとして生徒の実態を見ていると、人見知りしない生徒が多く、実習Ⅰで行ったアサーショントレーニングの必要性は感じなかつた。そこで、目の前の生徒たちに必要なことは何なのかを考えていたところ、学校の実態を教えていただく機会があり、全国学力学習状況調査の結果から、自分自身に対して肯定的な思いが低い生徒が多いということを伺った。初めて出会う人に対して人見知りをせずに話すことができる生徒が多いため、さらに視野を広げ多面的に思考できるポジティブ感情を用いた実習を行おうと考えた。つまり、ポジティブ感情を身に付けることができれば人生への満足感と自己肯定感を高め、自信を持って、積極的なコミュニケーションを行うことができるとの思いから授業実践に生徒の育成を目指して取り組んできた。しかし実習Ⅱでは、ポジティブ感情を持つことができたかどうかの調査を行う自己評価シートの形式が不十分な状況であり、出来上がってなかつたため、実習において確認することができなかつた。

(3) 実習Ⅲにおける結果と考察

実習Ⅱの結果を受けて、実習校のご協力もあり、実習Ⅲにおいても実習Ⅱと同じ研究テーマで実践に取り組ませていただいた。教科も同様に英語を活用することができ、目標達成シートの記述を含めた実践を行わせていただいた。ここでは、アンケートを追加したことでポジティブ感情を持つことができたかの調査を行うことができた。ほとんどの生徒が、ポジティブ感情を得ることができたと言える。

(4) 追加実践における結果と考察

今までの実習の経験から、実習Ⅱの学校においてその後のサポーター活動の中で行わせていただいた追加実践では、生徒一人一人に対して、具体的な目標を意識させることばがけを行い、全員が授業中に目標を意識することができた。この授業でのポジティブ感情を得ることができたと言えた生徒は過半数だった。前述した先行研究で行われていたような取組を、自分の授業実践にも取り入れてみた。選択させた目標ではあるが、その目標を達成させることを具体的に意識させた努力をさせたことにより、よりよいポジティブ感情を

生徒に感じさせることができたのではないかと考えている。

VIII 課題

異なる中学校での実習だったため、目の前の生徒それぞれに必要なと考えられるコミュニケーションの種類が違い、一貫した継続研究が行えなかつた。また、実践に入る前に生徒の様子が分かるような調査を十分に行うことができていなかつた。そのため、正確な資料を基にした分析ができず、中途半端な結果しか出すことができなかつた。自分自身の見通しの甘さや実習期間の制約もあり、なかなか思うような成果が出せなかつたことについては深く反省している。しかし、目の前の生徒たちのよりよい成長を願うとき、そのような状況であったとしても、素早く、より確実な生徒理解をし、実践に生かしていかななくてはいけないと感じた。このことは、教師として常に考えていかなければならないことである。

また、より確実な生徒理解をした上で、よりよい変容がみられるような適切な調査を最初に行わなければいけないということも分かった。この報告の内容では、より深く確実な研究ができたところまではいけなかつた。目の前の実習をこなすことでいっぱいになってしまっていたためであり、余裕を持って実習にはいられなければいけなかつたと深く反省している。

IX 最後に

今回の実習では、心を育てるコミュニケーションの育成というテーマで研究を行ってきた。生徒がコミュニケーションを円滑に行えるように、必要としていることは何かを知るためには、きちんとした生徒理解ができていないと、明確に知ることができないということが身に染みて分かった。今後教師になることができれば、この実習において生徒理解の重要性を理解することができたため、十分な準備とより確実な生徒理解に重点を置いた実践を心がけていきたいと思っている。

「生徒がコミュニケーションを円滑に行っていくためにはどうすればいいのか」ということを考えながら、実践を行ってきたが、その中で、これまでの自分のコミュニケーション能力について考えるようになった。私は、教師間でのコミュニケーションや生徒とのコミュニケーションで多くの壁にぶつかってきた。ときには、悩んだことも多くあった。しかし、それを、自らの努力や友人、家族の支えで乗り越えて、ようやく自分のコミュニケーション能力を身につけることができたと考えている。自らの経験からも、生徒のコミュニケーション能力を高めたいならば、まずは教師が自分自身のコミュニケーション能力を高め、生徒の手本になるようにしていかなければいけないと知ることができた。今後の支えとできればと考える。

【主な引用・参考文献、資料】

① 「中学校学習指導要領解説 外国語編」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_010_1.pdf

② 古川真人『ポジティブ教育心理学』(尚学社 2012)

③ 菖蒲知佳；斎藤菜穂；南杏佳里『ポジティブ心理学を用いた心理教育の特徴』(2017)

④ Susana C. Marques『Measuring and Promoting Hope in Schoolchildren』(2009)

⑤ 阿部千春『構成的グループエンカウンター事典』(図書文化 2005)

⑥ ロバート・E. アベルティ、マイケル・L. エモンズ『自己主張(アサーティブネス) トレーニング一人に操られず人を操らず』(東京図書 1997)

⑦ 佐藤学『教育の方法』(左右社 2010)

⑧ 阿原成光「中学校での英語の授業」

<https://www.youtube.com/watch?v=JT3r0zTvHiw>
(2017年1月31日)

⑨ 上野ひろ美『現代社会における「子ども文化」

成立の可能性—ノリを媒介とするコミュニケーションを通して—』(奈良教育大学 日本教育方法学会 紀要「教育方法学研究」 2007)

- ・吉本均『教材解釈と発問づくり』(明治図書 1990)
- ・吉本均『授業観の変革—まなざしと語りと問いかけを—』(明治図書 1992)
- ・趙卿我『授業における「学習集団」のあり方：学習集団論争に着目して』(京都大学 2014)
- ・「心の外傷とその対応：文部科学省」
- ・前田正治ほか編『PTSDの伝え方—トラウマ臨床と心理教育—』(誠信書房 2012)
- ・廣岡逸樹『学校トラウマと子どものこころのケア』(誠信書房 2005)
- ・小林正幸『教師のための学校カウンセリング』(有斐閣アルマ 2013)
- ・望月昭彦『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』(大修館書店 2012)

付記

私は三つの実習校で実習をさせていただきました。実習Ⅰでお世話になった実習校では、2016年9月から学校サポーターとしてお世話になりました。右も左も分からない状態の私に教師の学校生活というものを教えていただきました。生徒理解や授業などについて何度も失敗をしましたが、先生方に見守っていただいたおかげで、次に進むことができました。実習Ⅰでの研究が中途半端なところで終わってしまったことは悔やまれますが、教師として必要なことを学ぶことができた期間になりました。

実習Ⅱでお世話になった実習校では2016年から、外国人生徒への日本語支援でお世話になりました。学校外部者でしたが、日本語支援をしやすい環境づくりをしてくださいました。事情がありサポーター校として急遽2017年9月から受け入れていただきました。急遽だったにも関わらず、受け入れてくださりました。私を担当してくださった先生をはじめ、多くの先生方が丁寧に指導して下さり、教師という仕事の魅力を知ることができました。サポーターや実習に行くことが毎日楽しみでした。

実習Ⅲでは短い期間にも関わらず、研究や授業が上手くいくよう支えていただきました。支えてくださった先生方のおかげで、研究授業では今まで自分の行った授業の中で、一番満足いく授業を行うことができました。未熟な部分が多いため、先生方に迷惑をかけてしまいましたが、意義のある実習をすることができました。

ゼミでは山内先生にお世話になりました、悩んでいる時はアドバイスをくださり、落ち込んでいる時は解決策や優しい言葉をかけていただきました。この2年間を乗り越えられたのは山内先生のおかげだと思っています。

私は多くの先生方に支えていただき、実習を乗り越えることができました。この2年間で関わってくださった実習校の先生方、教職大学院の先生方に沢山お世話になったことは忘れません。全ての先生方に感謝申し上げます。